東京文化発信プロジェクト

TOKYO PAPER

トーキョーペーパー

for Culture

フォー　カルチャー

美しく賢いもの、快適で利便性のある暮らしを追求するなかで、生まれる文化がある。同時にそこからこぼれ落ちる、古くて不便なもの、弱くて醜いもの。そこから生まれる文化もある。暮らしのなかで巻き起こるさまざまな喜怒哀楽も、街のどこかで思わぬ作品と出合って心震える体験も、同じ一線上にあって、きっと繋がっている。なぜなら文化とは人の営みそのものだから。東京文化を考えることは、自分の生き方を見つめること。なんてことを思いながら、季節は夏。この街を日々散策、研究を重ねて『TOKYO PAPER for Culture』は第五号目を迎えました！ 今号もよろしくお願いします。

The pursuit of a life filled with things that are beautiful and smart, comfortable and convenient gives rise to a culture. The things that fall away in this process are the old and the inconvenient, the weak and the ugly. These give rise to another culture. The whole gamut of human emotions that surround us in our daily lives, and the experiences that stir our hearts as we unexpectedly encounter the things that people have created all across this city are undoubtedly all connected, as part of the same continuum. That's because culture is human activity itself. Thinking about the culture of Tokyo means looking at the ways in which we live our lives. While we think such a thing, summer has come. We hope you enjoy it!

第五号／005

東京ハレとケ物語

TOKYO CULTURE WALK
ブンプロの文化プロジェクトを散策

東京センチメンタル
モーリー・ロバートソン（ジャーナリスト）× 西 加奈子（作家）× ユザーン（タブラ奏者）

研究テーマ⑤：花街文化の心意気
～芸者という生き方～

東京センチメンタル

2020年東京五輪に向けて、改めて世界から見た東京の姿が問われ、関心が集まっています。あなたの目には、東京はどう映っていますか？ そこで今回の東京文化座談会には、国際経験が豊富でユーモアに富んだ表現者、モーリー・ロバートソンさん（ジャーナリスト）、西 加奈子さん（作家）、ユザーンさん（タブラ奏者）を“客員研究員”としてお招きしました！

As the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics approaches, there is renewed interest in Tokyo's image in the eyes of the rest of the world. How does Tokyo appear to you? To explore this question, we invited three leaders in the field of the expressive arts to participate in a round-table discussion of Tokyo culture as “guest researchers”. Journalist Morley Robertson, author Kanako Nishi, and tabla player U-zhaan all have abundant international experience and a humorous outlook on life.

都内に4軒残る落語定席のなかでも、唯一の木造建築として知られる、新宿末廣亭。そこへ最初に到着したのは西さんでした。間もなくしてモーリーさん、そしてユザーンさんが到着し、早速、末廣亭～花園神社～ゴールデン街～新大久保コリアンタウン散策へ。この日が初対面となったお三方ですが、モーリーさんの即興トークを軸に、笑いの絶えない現場で、我々、研究員からもサッと質問。「客員研究員のみなさま、世界のなかで、日々のなかで、東京はどう映っていますか？」

西 加奈子（以下西）：イラン、エジプト、大阪、東京と暮らしてきましたけど、大阪が一番長いから、“故郷は？”というと、やっぱり大阪。ただこの10年は東京で暮らしてきて、この街のいいところもいっぱい知りました。私の場合、友達ができたらその街のことが好きになるので、そういう意味でも、東京は好きです。

ユザーン：友達がいると好きになるんですか。僕もカルカッタやムンバイに友達はたくさんいるけど、街自体はあんまり好きじゃないな（笑）。腹が立つことも多いし、何かもうあそこだけ地球から切り離して衛星にして回しておきたいぐらい……。

西：何があったんですか（笑）。

ユザーン：ありすぎて、思い出せない（笑）。

モーリー・ロバートソン（以下モーリー）：僕も若い頃インドに行ったけど、熱と下痢でうなされて、ほとんどホテルから出られなくなって。

西：インドは危険なことがあった自慢、できますよね。インドに住んだ人は無条件に強そうなイメージもありますし。

ユザーン：たしかにお腹ぐらいは強くなるかもしれないですね。話が逸れましたけど、僕は東京に対して好き嫌いの感情はあまり持ってないです。ただ、東京にいないと仕事が成立しにくいんですよ。仲間のミュージシャンも、やっぱり圧倒的に東京に住んでいる人が多いですしね。

モーリー：僕が10代で富山の田舎から上京するときは、東京にはあこがれの目線が強かった。どうやって友達を作ったら良いのかもわからなくて葛藤して。今もその印象が残っているところがあります。

西：東京という言葉は、センチメンタルな響きがありませんか？ 私、芸人の又吉直樹さんが書かれたエッセイ『東京百景』が大好きなんですけど、これが例えば『大阪百景』だとグリコが想い浮かんで、一気にセンチメンタルじゃなくなって（笑）。あと、東京は知り合いに会わずに住んでいける街だと思うんです。大阪は日本の“第2の都市”って言われていますけど、それでも狭い。呑み屋街も大体決まっているから、2軒目にタクシーで向かうなんて、考えられへん。でも東京だと渋谷で飲んだ後、「恵比寿行こう」って、ありますよね。その、東京のいろんな地域がそれぞれに栄えているということが、結構びっくりで。それによってどこで呑んでいても顔ささへんから。大阪やったら知り合いに会ってしまう。それが心地よかったり、窮屈やったり。

ユザーン：顔ささない？

西：こっちでは通じません？ 知り合いと

かと誰にも会わない、みたいな意味で。
モーリー：その“顔をささない”ことが、東京の孤独感にも繋がっていますよね。
ユザーン：僕はタブラという楽器を選んだ時点からなぜか孤独な感じがあるんです。どこに行ってもアウェイな気がするというか。
モーリー：でもユザーンさんとコラボすることで、何かそこに即興性やアクシデントをみんな求めているじゃないですか。
ユザーン：そうなんですかね？ 自分が何を期待されているのか未だにわかっていないんですけど。でも東京の人口の多さ、芸術に対する関心の高さはすごいなあと感じます。たとえ東京だけで月に20本ライブをやったとしても、どの会場にもお客さんがきてくれるし。ほかの街でそんなに（本数を）やっても人は入らないですよ。まあ何だかんだ言って、東京の人はお金があるのかもしれないです。
西：「友達やから、タダで入れて」の、大阪によくある関係性も好きやけど、東京の“お金ありき”みたいな感覚は、私は好き。お金を払う、お金が動くということが大前提にあるのは、気が楽です。お金がきっかけでだめになるのって、すごく悲しいから。
モーリー：大阪の場合、対象に対して「すごく好きやねん！」っていう丸出し感というか、その純粋さで成立しているものが多い気がしていて。一方の東京は純粋さに加えて、伝えるためにはどう宣伝する？ どうしたらお金が儲かる？ みたいな、戦略を感じるものが多い印象ですね。
ユザーン：自分を突き詰めていく気持ちとは別に、他人からの見え方、見られ方を気にしている感じが東京にはありますよね。「こういうふうに、見えるようにしよう」と、第三者がいるような街。

文化にもっと多様性を！

モーリー：東京ってアノニマスな印象があって。例えば演じる側も観る側も「主催者と親しいから出演する」「友達を作りたいから観に行く」とか、各々の関係性から始まるよりも、「私の提供するコンテンツのクオリティーは90分間で5,000円です」「そのクオリティーならお金出します」という、お金で価値を峻別して、契約関係をビシッと結んでいる印象の方が強くて。だから「5,000円は高いけど、価値はある」と思ってもらうために、宣伝も魅力的に工夫してね。結果、高額でもそれなりに席は埋まる。そういうある種ドライな取引関係が、東京文化を作っている側面があって、でもそれは、僕はすごくクールだと思う。
ユザーン：東京の文化、と言えば、六本木のスーパーデラックスは、東京の塊みたいな感じがして、ずっとアンダーグラウンドシーンを支えている気がします。
西：うん、東京らしい感じがします。
モーリー：あそこは感度が高く、お金が取れる街ってことをわかっていて、上手に運営している印象があるなあ。東京は資本主義の厳しいルールに順応している街で、お金は大切。僕はバブルの崩壊後、フリーランスになって仕事が入らない年月を経験したこともあって、お金のありがたみが身に染みている。そのため、今は欲深いんです（笑）。被災地の復興も切り離して考えては、絵空事になってしまう。日本全体の景気回復と私自身が金持ちになる。この三者を同時進行させないと継続できずに息切れすると思うんですよ。おふたりは「経済的にでっかくいこう！」とか、そういう夢は見たりしますか？ それとも好きなことをとことんやるという感じですか？
西：私、作家になるまでずっとアルバイト生活していて、就職活動もしていないんですよ。当時は就職氷河期だったので、フリーターしていても目立たへんっていうか。そういう時代やから、逆に就職して稼ぐことよりも好きなことを追いやすかったかもしれません。今振り返ってみると、それはラッキーだったなって。
モーリー：変な競争がない、と。
西：そうですね。今、作家の世界でも同世代はとても仲が良いです。上の世代の方たちに、「何であなたたちはそんなに仲いいの？」って驚かれるんですけど、本が売れない時代だから、「私が、私が」やったら、だめで。だから、山崎ナオコーラさんや綿矢りささんや、同世代の作家同士、「とにかくみんなでいいものを書いて、売り場を増やそうよ！」って言いながら、お互いに励んでいます。それはきっと上の世代の方たちから見たら、「つまらん、野心がない」と思われているかもしれません。
ユザーン：僕も不況が当たり前のなかで活動しているから、これだけ稼ぎたい、みたいな強い野心はないです。CDが売れなくなった、とよく言われますが、音源を買うという習慣そのものがなくなっている感じですね。
モーリー：EXILEも聴くけど、ジェイムス・ブレイク[※1]も聴くみたいな、文化に対する多様性がもっと欲しい。
ユザーン：Ametsub[※2]って知ってます？ ダブ・ステップっぽいトラックもあってすごくかっこいいですよ。
モーリー：本当!? 聴いてみます！
西：聴いてみたい。
モーリー：今日おふたりと歩いた末廣亭やゴールデン街のような街並みも残って欲しいし、でも同時にガッツがある若い発想で生まれた個人商店が経済原則に巻き込まれて面白く回転してくれたらいいな。とにかくいろんな文化がクロスオーバーして欲しいんです。
ユザーン：まだまだ行儀よく住み分けられている気はしますね。
西：あと、東京は女性に優しい街であって欲しい。例えば妊婦さんが大変そうに大きな荷物を持っていても、男性はナンパだと思われたくないから、声かけるのをためらってしまうんですって。思いやりの気持ちはあるのに。だから男性が女性に「大丈夫ですか」ってナチュラルに声をかけることができるような街になったらいいなって思います。
モーリー：思いやりが、社会を作る。
ユザーン：あの、今日のテーマである東京、国際性、とかから色々脱線したままなんですけど大丈夫でしょうか（笑）。

Morley Robertson

×

Kanako Nishi

×

U-zhaan

So Tokyo’s a city where you don’t get spotted, then.

※1　シンガー・ソングライター。UKクラブ・シーンで人気に火がつき、2011年発表のメジャー・デビュー・アルバム『ジェイムス・ブレイク』が大ヒットを記録する。

※2　東京を拠点に活動する音楽家。2003年発表のコンピ『forma 2 .03』に参加後、『Linear Cryptics』でアルバム・デビュー。これまで3枚のアルバムを発表。

Kanako Nishi: I've lived in Iran, Egypt, Osaka, and Tokyo, but when people ask me where I'm from, I tend to say Osaka, because that's where I lived for longest. However, I've been living in Tokyo for the last ten years and I've discovered many good things about this city. I start to like a place if I make friends when I'm living there, so I like Tokyo in that sense as well.

U-zhaan: You like a place if you have friends there? I've got lots of friends in Kolkata and Mumbai, but I don't really like the cities themselves <laughs>. There are many things that make me angry there – to the extent that I want to separate those two cities from the Earth completely and send them off into space as satellites....

Kanako: What happened <laughs>?

U-zhaan: Too many things for me to recall.

Morley Robertson: I went to India when I was young, but I was hardly able to leave my hotel because I got a fever and diarrhea.

Kanako: You can boast that you experienced danger in India, can't you? After all, people who've lived in India definitely have an image of being strong.

U-zhaan: Your stomach certainly becomes stronger, at least, I suppose. We've deviated from the point, but I don't really have any strong feelings either way about Tokyo. However, it would be difficult to succeed in my work without being in Tokyo. After all, the overwhelming majority of the musicians I work with live in Tokyo.

Morley: When I used to come up to Tokyo from the countryside of Toyama where I lived in my teens, I really longed to be part of Tokyo. I was conflicted, because I didn't know how to make friends. It still has lingering traces of that impression for me, even now.

Kanako: Don't you think that the word "Tokyo" sounds somehow sentimental? I love the essay collection *Tokyo Hyakkei* [One Hundred Views of Tokyo] by the comedian Naoki Matayoshi, but if someone wrote a similar book about Osaka for example, the image of the Glico runner would spring to mind and you'd instantly stop feeling sentimental <laughs>. I also think that Tokyo's a city where you can live without meeting any acquaintances. Osaka's said to be Japan's second city, but it still has a small-town feel. Most of the bars are located in the same area, so going on to a second bar by taxi would be unimaginable. But in Tokyo, after drinking in Shibuya, it's quite normal to say something like "Let's go to Ebisu next", don't you think? I was quite surprised by how the various districts of Tokyo each prosper individually. So no matter where you're drinking, you just don't get spotted [Kanako used the expression "kao sasahen", which is peculiar to the Osaka dialect].

If it was Osaka, you'd definitely get spotted by someone you knew.

U-zhaan: Kao sasahen?

Kanako: Ah, you're not familiar with the

I wonder what Ametsub's like?

Tokyo Sentimental

term up here? It's propably Osaka dialect – I mean you don't just happen to be seen by someone you know by chance.

Morley: That phenomenon where you don't get spotted by people you know does lead to a sense of isolation in Tokyo.

U-zhaan: Somehow, I've felt isolated ever since I took up the tabla. Or rather, no matter where I go, I've felt apart from others.

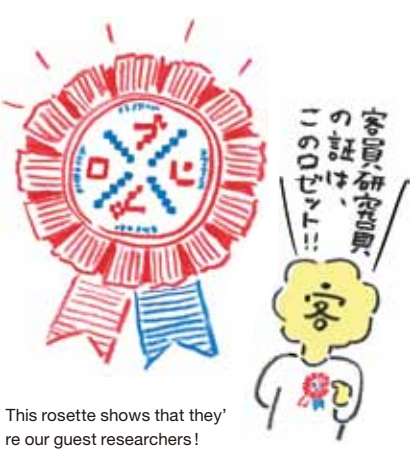
Morley: But surely everyone who collaborates with you is aiming for some kind of improvisation in doing so?

U-zhaan: Do you think so? I still don't know what people are expecting of me. But I'm still amazed by the scale of the population in Tokyo and the depth of people's interest in the arts. For example, even if I do 20 live performances a month in Tokyo alone, people are still kind enough to fill all of the venues. If I did that many performances in other cities, people wouldn't come. Well, after all, perhaps it's that people in Tokyo have money to spare.

Kanako: I do like the sense of connection you often get in Osaka, where you can say, "I'm a friend, so let me in free", but I also like the focus on money in Tokyo. You feel reassured when the basic premise is paying money and the movement of money.

Morley: In the case of Osaka, I get the feeling that things often succeed becausepeople don't disguise their feelings and are honest about what they think – they'll say "I adore it!" On the other hand, while there's a sense of honesty in Tokyo as well, you still often get the impression that there's a strategy, in terms of how to advertise it and how to make a profit.

U-zhaan: Apart from taking themselves seriously, people in Tokyo do have a tendency to worry about how others see them. It's as though there's always a third party in this city – people think "Let's make it look like this".



This rosette shows that they're our guest researchers!

More diversity in culture!

Morley: Tokyo gives the impression of anonymity. For example, rather than each relationship beginning from the performer and the spectator thinking "I'm friendly with the organizer, so I'll appear in it" or "I want to make friends, so I'll go and see it", there's a strong sense that rigorous distinctions are made in terms of value on

the basis of money, such as “The quality of the content I provide is worth 5,000 yen for 90 minutes” or “If this is the quality, then I’ll pay for it”. You get the impression that there’s a strictly-defined contractual relationship. That’s why people try to devise ways of making the advertising attractive as well, so that people think, “5,000 yen’s expensive, but it’s worth it”. As a result, the seats get filled, even if the tickets cost a lot. Although this rather dry business relationship has aspects that shape Tokyo’s culture, I do think it’s really cool.

U-zhaan: If we’re talking about Tokyo culture, SuperDeluxe in Roppongi seems to be Tokyo through and through, and I get the feeling it has consistently supported the underground scene.

Kanako: Yeah, it does feel typically Tokyo.

Morley: I get the impression that they’re doing a good job of running it, with a high level of sensitivity and an understanding that you can make money here. Tokyo’s a city that has adjusted to the strict rules of capitalism, so money’s important. After the collapse of the economic bubble, I started freelancing and there were long periods when I had no work at all, so I’m deeply aware of the value of money. That’s why I’m really miserly now <laughs>. When it comes to the reconstruction of the disaster-stricken areas as well, it’s absurd to consider the issue in isolation from the question of money. Economic recovery throughout Japan will make me richer as well. If we don’t promote these three things simultaneously, we’ll run out of steam and won’t be able to continue. Do you two ever dream of doing things on a grand financial scale? Or do you prefer to focus entirely on the things you enjoy?

Kanako: Until I became an author, I was living entirely off what I made from casual work, so I’ve never even engaged in job-seeking activities. That was the time of the employment ice age, so it wasn’t even considered unusual to be a part-time job-hopper. Because it was that kind of era, it was perhaps actually easier to pursue the things you enjoyed, rather than finding a job and earning a living.

Morley: There wasn’t any strange sense of competition, you mean.

Kanako: That’s right. Now, even in the writing world, all of us from the same generation get on really well. The older generation are surprised and say things like “Why are you lot so friendly with each other?”, but because it’s an era when books don’t sell as well as they used to, we’d be finished if we were all “me, me, me”. That’s why Naocola Yamazaki and Risa Wataya and other writers of our generation encourage each other, saying, “Let’s just all write something good and increase the number of places that sell our work!”

U-zhaan: I’ve pursued my own activities with the recession as a fact of life and I have no strong desire to make a certain amount of money. I’m often told that CDs aren’t selling anymore and I get the feeling that the custom of buying a source of sound is itself dying out.

Morley: I’d like to see a more mature musical literacy developing in Japan, both among listeners and among those who sell music. I’d like them to cultivate greater diversity, so that people might listen to EXILE, but they also listen to James Blake, for example.

U-zhaan: Are you familiar with Ametsub? Some of the tracks have a dubstep feel to them and they’re incredibly cool.

Morley: Really?! I’ll have a listen!

Kanako: I’d like to listen to it.

Morley: I’d like the city to preserve streetscapes like Suehiro-tei and Shinjuku Golden Gai, where we’ve been walking today, but at the same time, it would be good if the privately-owned shops that have emerged from the gutsy ideas of young people could become intertwined with economic principles and be turned around in an interesting way. In any event, I’d like to see crossovers between a variety of cultures.

U-zhaan: It does rather feel like everyone is neatly compartmentalized and segregated.

Kanako: Also, I’d like Tokyo to become a woman-friendly city. For example, even if men see a pregnant woman struggling to carry some heavy piece of luggage, they’re hesitant to offer their help, because they don’t want her to think they’re trying to chat her up. The consideration for others is there, but.... That’s why I’d like to see Tokyo become the kind of city where men can naturally say to a woman, “Are you OK? Do you need any help?”

Morley: Consideration for others is what creates a society.

U-zhaan: Um, I think we’ve strayed quite a long way off course from our original themes for today – Tokyo and openness to the world. Is that OK? <laughs>.

西 加奈子
Kanako Nishi

1977年テヘラン生まれ、カイロ、大阪育ち。2004年『あおい』でデビュー。著書に『さくら』『きいろいゾウ』『円卓』『漁港の肉子ちゃん』などがある。『通天閣』で織田作之助賞受賞、『ふくわらい』で第1回河合隼雄物語賞を受賞。最新作は『舞台』。

Born in Teheran in 1977, raised in Cairo and Osaka. Published her debut novel *Aoi* in 2004. Other books she has written include *Sakura*, *Kiiroi Zou*, *Entaku*, and *Gyokou no Nikuko-chan*. Won the Oda Sakunosuke Prize for *Tsutenkaku* and the first Kawai Hayao Story Prize for *Fukuwarai*. Her latest novel is *Butai*.

モーリー・ロバートソン
Morley Robertson

1963年ニューヨーク生まれ。これまでJ-WAVE「Across The View」をはじめ、様々なメディアに独自の世界を展開。2005年からはポッドキャスト番組「i-morley」を開始。政治、社会問題、芸術などの話題を扱う。現在、block.fmにレギュラー出演中。

Born in New York in 1963. Has used a range of media to provide an insight into his unique world, most notably the radio program “Across The View” on J-WAVE. Launched his “i-morley” podcast in 2005. Deals with topics including politics, social problems, and the arts. Currently appears regularly on block.fm.

ユザーン
U-zhaan

1977年埼玉生まれ。オニンド・チャタルジー、ザキール・フセインに師事。2000年“ASA-CHANG&巡礼”に加入し、4枚のアルバムを発表。2010年脱退。レイ・ハラカミを始め、様々なアーティストと制作を行う。著書に『ムンバイなう。』『ムンバイなう。2』がある。

Born in Saitama in 1977. Studied with Anindo Chatterjee and Zakir Hussain. Joined Asa-Chang & Junray in 2000 and released 4 albums with the group. Withdrew from the group in 2010. Has collaborated with Rei Harakami and a variety of other artists. Author of *Mumbai Now* and *Mumbai Now 2*.

東京、文化散策

人の営みそのものである、文化。東京でも、多様な文化が日々生まれ育っています。
人と文化のより良い付き合いとは何かを模索し、世界的な文化創造都市・東京の実現に向け、
様々なプログラムを実施しているブンプロ。文化研究所であるこの紙面上で、
文化研究員が散策（＝研究）しながら、ブンプロの年間プロジェクトを視察していきます。

"Culture" is what people do—and it's constantly developing and diversifying in Tokyo.
BUNPRO* organizes programs designed to seek out the ideal relationships between people
and culture and make Tokyo into a city of cultural creation in the global arena.
As a "cultural research institute" in paper form, this issue follows our "cultural researchers"
as they walk around (research) the city and profile BUNPRO's projects for the year.

＊BUNPRO is a nickname of Tokyo Culture Creation Project

TOKYO CULTURE WALK

ブンプロが主催する文化プログラムは、
以下の4本柱から構成されています。

BUNPRO will produce several cultural
programs, building around the following
four main projects.

FESTIVAL フェスティバル	KIDS/YOUTH キッズ／ユース
ARTPOINT アートポイント	NETWORKING ネットワーキング

1
東京発・伝統WA感動　8.29 (Fri)
伝統芸能　八王子車人形の世界

Tokyo Traditional Arts Program
The World of Hachioji Kuruma Ningyo, a folklore puppetry

江戸時代から八王子に伝わる伝統芸能、車人形。美しい娘の人形が恋に身を焦がす「日高川入相花王」、人情話の傑作で芸妓とコラボレーションした「文七元結」をいちょうホール（八王子）で上演。

This program introduces audiences to Hachioji Kuruma Ningyo, a part of the Hachioji culture since the Edo period, through two performances: "Hidakagawairiaizakura", in which a beautiful girl puppet burns with the passion of love, and "Bunshichimottoi", a collaborative take with geisha performers on the classic human-interest story.

2
東京発・伝統WA感動　10.28 (Tue)
至高の芸、そして継承者～狂言

Tokyo Traditional Arts Program
Kyogen～Supremacy and Successors

至高の芸を持つ狂言界の人間国宝、野村万作、山本東次郎、野村萬の3人と、彼らのもとで修業に励む継承者たちによる公演。それぞれのお家の得意演目を、国立劇場大劇場で披露します。

Mansaku Nomura, Tojiro Yamamoto, and Man Nomura—Japan's three Living National Treasures of the kyogen world—have set the standard of kyogen supremacy. Their successors, meanwhile, have trained diligently to carry on their masters' proud tradition. This program unites the "supremacy" and the "successors" at the National Theatre.

3
東京発・伝統WA感動　10.7 (Tue)
日本の笑い―古典と現代

Tokyo Traditional Arts Program
Japanese Comedy－traditional and contemporary

国立能楽堂を舞台に、狂言師の野村万蔵が狂言ならではの表現や型の魅力をトークや実演で紐解きます。ドロンズ石本やヒロミチお兄さんこと佐藤弘道を迎え、コントと狂言の融合に挑戦します。

Kyogen performer Manzo Nomura will take the stage at the National Noh Theatre to delight the audience with stories, explanations, and demonstrations of the modes of expression unique to kyogen. The event will also welcome Dronz Ishimoto and Hiromichi Sato for an exciting fusion of the kyogen and comedy skit styles.

4

東京アートミーティング（第5回）

9.27 (Sat) ↓ 2015. 1.4 (Sun)

Tokyo Art Meeting V

野村萬斎を総合アドバイザーに迎え、「アート・身体・パフォーマンス」をテーマに、伝統から現代までクロスオーバーしながら多様な身体表現の可能性を探ります。東京都現代美術館を中心に開催。

With Mansai Nomura as general advisor, Tokyo Art Meeting V will explore the possibilities of a diverse range of physical expression, stretching from traditional to contemporary and crossing over time periods and genres, around the theme of “Art - Body - Performance”. Many of the events will be held at Museum of Contemporary Art Tokyo.

5

TERATOTERA

TERATOTERA

吉祥寺を拠点に、JR中央線高円寺駅から国分寺駅間を中心に現在進行形のアートを発信する地域密着型アートプロジェクトです。「テラッコ」と呼ばれるボランティア主体の企画なども多数実施。

Based in Kichijoji, TERATOTERA is a community-centric art project that aims to showcase ongoing arts in the area between Koenji Station and Kokubunji Station on the JR Chuo Line. The project also does a wide variety of planning, including projects for TERAKKO, a volunteer group.

6

東京大茶会2014

(a) 9.27-28 (Sat-Sun)

Tokyo Grand Tea Ceremony 2014 (b) 10.11-12 (Sat-Sun)

9月に江戸東京たてもの園（a）で、10月に浜離宮恩賜庭園（b）で大規模な茶会を開催。茶席や野点の他、（a）では子供向けの茶道教室、（b）では外国人向けのイングリッシュ野点などを楽しめます。

This event will be held in the Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum (a) and Hama-rikyu Gardens (b). In addition to offering cha-seki (indoor tea ceremonies) and nodate (outdoor tea ceremonies), the events will also feature tea ceremony workshops for children (at site (a)) and Outdoor Tea Ceremony in English (at site (b)).

7

キッズ伝統芸能体験

8月 Aug. ↓ 2015. 3月 Mar.

Traditional Performing Arts for Kids

能楽や日本舞踊、三曲、長唄の伝統芸能を一流の芸術家から子供たちが直接指導を受け、その成果を舞台で発表。伝統芸能に親しむとともに、次世代への継承を目指します。中高生限定コースも新設。

Children will receive direct instruction from leading artists in the fields of Noh, Nihon buyo, Sankyoku, and Nagauta, and they will give performances on stage. The project aims to give children an appreciation of traditional performing arts and enable them to carry on the spirit of the artistic heritage. New courses for youth are started.

伝統文化を見て、
知って、体験して！

See, know, and experience
traditional culture!

プログラムディレクター
山口紀子
Program Director
Noriko Yamaguchi

8 Noh Workshop

大人の
ワークショップ！

Workshops for adults!

9 Art Accsess

野村 誠
Makoto
Nomura

千住の魚市場で、
1,010人の音楽祭!?

1,010 people in the Senju
fish market for a music festival!?

作曲家、鍵盤ハーモニカ・ピアノ奏者。「千住だじゃれ音楽祭」ディレクター

Composer, melodica player, pianist, and "Senju Pun-filled Music Festival" director

10 Art Station

中崎 透
Tohru
Nakazaki

街のひとりひとりが、
アートの主役

Everyone in the community
plays the lead role in art

美術家。水戸市内で遊戯室（中崎透＋遠藤水城）を運営中

Artist and proprietor of a playroom (Tohru Nakazaki + Mizuki Endo) in Mito, Ibaraki

EAT&ART TARO

アーティスト。
食をテーマに活動中

Artist with a focus on
food-themed projects

11 Topping East

子供ガムラン隊、結成！

Meet the children's gamelan!

新たな
東京文化を
つくる

Creating new
Tokyo culture

広報ディレクター
森 隆一郎
Public Relations Director
Ryuichiro Mori

東京が、文化を通じて
親しみやすい街になっていく

Culture is the key to making
Tokyo a more approachable place

8 東京発・伝統WA感動 能〜伝統の発見〜

10.13 (Mon)

Tokyo Traditional Arts Program
Noh〜rediscovering the tradition〜

仕舞、謡、囃子といった能楽のエッセンスを体験できるワークショップと舞台鑑賞をセットにした喜多能楽堂でのプログラム。驚きから生まれる「発見」で、改めて伝統の力を感じてみませんか。

This program at the Kita Noh Theatre combines workshops on the essentials of Noh—shimai (dancing), utai (chanting), hayashi (musical accompaniment)—and performances to spark the wonder of discovery and show participants the power of tradition.

9 アートアクセスあだち 音まち千住の縁

Art Access Adachi:
Downtown Senju - Connecting through Sound Art

足立区千住地域で、アートを通じた新たなつながりを生み出すために、「音」をテーマに多様なプログラムを展開。作曲家・野村誠と「千住だじゃれ音楽祭」での「千住の1,010人」などを企画。

Set in the Senju area of Adachi, Tokyo, this project organizes a variety of programs with a "sound" theme in hopes of fostering new connections through art. Main program is the creation of a "1,010 People in Senju" at the "Senju Pun-filled Music Festival", a collaborative effort with composer Makoto Nomura.

10 としま アートステーション構想

Toshima Art Station Koso

人と人、人と街をつなぎ、自発的なアート活動が生まれる仕組みづくりを目指します。アートステーションZでEAT&ART TAROと、新設するアートステーションYで中崎透とのプロジェクトが進行中。

Toshima Art Station Koso strives to create an environment that spurs self-motivated, unrestrained art through connections among people and the community. The initiative also includes projects with EAT & ART TARO at Toshima Art Station Z and Tohru Nakazaki at the new Art Station Y.

11 トッピングイースト

Topping East

東京スカイツリー®のある東東京エリアで、音楽の広がりを探るプロジェクト。子供たちにとって馴染みの薄い楽器の楽団を結成する「ほくさい音楽博」や公共空間での音楽プログラムを展開します。

Aiming to spread music around the East Tokyo area, home to TOKYO SKYTREE®, the Topping East project will form a musical troupe featuring instruments that most kids have never seen and hold the "Hokusai Music Fair" and sound-oriented programs in public spaces.

12

東京迂回路研究

Tokyo Diversion Research

障害やケア、労働、ジェンダー、国籍など社会における「多様性」と「境界」にまつわる課題に対し、フィールド調査と対話を通じて“生き抜くための技法”としての「迂回路」を研究します。

This project will explore elements of social diversity and boundaries, including disability, care, and nationality, and learn more about the “diversions” that people need to survive through field research and open dialogue.

13

東京スープとブランケット紀行

Tokyo “Soup and Blanket” Travelogue

演出家・劇作家の羊屋白玉を中心に、生活圏に起こる物事の「終焉」と「起源」、そしてその間を追求するアートプログラムを展開。テーマに呼応するゲストを交えたトークシリーズなどを行います。

The focus of Tokyo “Soup and Blanket” Travelogue, led by theatre director and dramatist Shirotama Hitsujiya, is to organize art programs that offer a window on our spheres of existence in pursuit of “beginnings”, “endings”, and the spaces in between. The project will invite guests for a series of talk shows on the central themes.

14

Tokyo Art Research Lab（TARL）

Tokyo Art Research Lab (TARL)

アートプロジェクトを担う全ての人に開かれたラボ。社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指し展開。現場の課題に応答した研究開発プログラムの他、人材育成プログラムも充実。

This research program, open to everyone involved in organizing art projects, hopes to expand the potential of what art projects can do in society through a wide variety of human resource development programs and research and development programs geared toward real problems in the field.

ネットワーキング事業

NETWORKING Project

“世界的な文化創造都市・東京”を国内外に発信するため、秋に海外から文化芸術関係者を招聘し、国際会議や交流会を実施。友好都市提携20周年を記念し、ベルリンからもゲストをお招きする予定。

Various players in arts and culture will be invited from abroad for a conference and visitors program to communicate about “Tokyo as a city of global cultural creativity”. Guests from Berlin will also participate to commemorate the 20th anniversary of the friendship city relationship between Tokyo and Berlin.

BUNPRO Newsletter

ブンプロ便り

文化散策の途中、ポストの存在には気づきましたか？
ブンプロからの重要なお知らせ、お届けします。

On your culture walk, did you look in your mailbox?
You have important news from BUNPRO.

ブンプロのライブな情報をオンエア中！

Live BUNPRO information is on-air now!

渡辺 祐
Tasuku Watanabe

山田玲奈
Rena Yamada

J-WAVE（81.3FM）
『BUN-PRO TOKYO CREATIVE FILE』

オンエア日時：毎週土曜日11時35分～11時45分
（ワイド番組「RADIO DONUTS」内）

On Air: Saturdays, 11:35-11:45
(A segment of the “RADIO DONUTS” show)

http://www.j-wave.co.jp/original/creativefile/

TARLスクール、開講中！

The TARL School is in Operation!

official web site
tarl.jp

思考と技術と対話の学校

Tokyo Art Research Lab（TARL）による「思考と技術と対話の学校」は、アートプロジェクトの運営に精通し、NPOなど事務局のコアメンバーとなる人材を育てるためのスクール。様々な講座やアプローチを通じて、社会的な課題を「思考」し、現場をつくる「技術」を知り、問題意識を共有する人たちと「対話」するための能力を身につけていきます。

The Tokyo Art Research Lab (TARL) “Thought, Skill and Dialogue” exists to acquaint people with the management of art projects, and to foster human resources, people who will act as core members in the administration of NPOs and similar organizations. Through a variety of lectures and approaches, participants will gain expertise in the “thought” regarding social issues, the “skill” to actually put a project together, and the “dialogue” with others in the interest of creating a shared sense of the questions to be faced.

6月より開講中の「基礎プログラム」では、仕事を知る、現場に出会う、思考を深める／想像を広げる、情報収集力を身につける、の4つのアプローチから、思考と技術の対話の基礎力を磨いていきます。

The basic program, began in June, take four approaches, “Knowing the Job”, “Encountering the Site”, “In Search of Insight” and “Gathering Information” and create the foundation for dialogue regarding theory and technique.

仕事を知る Knowing the Job	現場に出会う Encountering the Site
情報収集力を身につける Gathering Information	思考を深める In Search of Insight

予告 **集中講座**
Intensive Lecture Series

9月 Sep.

日程：2014年9月予定
会場：東京文化発信プロジェクト ROOM302（3331 Arts Chiyoda 3F）
問い合わせ：080-3171-9724（TARL事務局／一般社団法人ノマドプロダクション）

Dates: September, 2014 (planned)
Venue: Tokyo Culture Creation Project Room 302
Information: Tokyo Art Research Lab Office/ Nomad Production 080-3171-9724

チームづくりや資金調達、リスクマネジメントや情報発信、アーカイブや評価・検証についてなど、各専門分野のゲストと、アートプロジェクトの運営基盤を整えるための「技術」を学ぶ2日間のプログラム。

A two-days program in which participants learn techniques necessary to formulating the basics of an art project administration. Topics include forming a team, fundraising, risk management, and generating information, archiving, evaluating, and verification. Specialists in each field serve as guest lecturers.

予告 **『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年』を読む**
Reading “Japanese Art Project, Then and Now: 1990 to 2012”

2015年1～2月 Jan.-Feb., 2015

日程：2015年1月～2月予定（全5回）
会場：東京文化発信プロジェクト ROOM302（3331 Arts Chiyoda 3F）
問い合わせ：080-3171-9724（TARL事務局／一般社団法人ノマドプロダクション）

Dates: January – February, 2015 (planned) Total of 5 lectures **Venue:** Tokyo Culture Creation Project Room 302 **Information:** Tokyo Art Research Lab Office/Nomad Production 080-3171-9724

熊倉純子（東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教授）をコーディネーターに迎え、現代の日本におけるアートプロジェクトについてまとめられたテキストを、ゲストとともに読み解きます。

Sumiko Kumakura, Professor of Musical Creativity and the Environment, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts, will serve as coordinator, joining with guests to read and expound on texts relating to the current status of art projects in Japan.

コラム

東京アートポイント計画 プログラムオフィサー 坂本有理
Tokyo Artpoint Project Program Officer
Yuri Sakamoto

TARLの学校では、アートプロジェクトを担う人々が基礎力を身につけるためのさまざまなプログラムを展開中。公式サイトtarl.jpでは、講座のドキュメントや、アートプロジェクトのための教本・ガイドラインを公開しています。ぜひご活用ください。

The TARL school has in operation a number of programs aimed at teaching the fundamentals to those who administer art projects. Lecture readings, along with teaching materials and guidelines relating to art projects are available online at tarl.jp.

ブンプロ室長　江川秀章
Senior Director
Hideaki Egawa

ブンプロは、東京で人とアートをつなぐお手伝いだけではなく、文化事業をつくり、人をつくり、組織をつくっています。その“てづくり感”こそ、ブンプロらしさと言えるでしょう。新しい手法を用いて東京文化をつくっていくために。そして2020年に東京オリンピック・パラリンピックを迎えた後も、日本と世界をアートでつなげる人材を育てていくために、ブンプロの挑戦は、これからも続いていきます。

BUNPRO links people with art in Tokyo, and creates cultural projects, staff, and organizations. It is this sense of creating that most typifies BUNPRO, with its aim of creating Tokyo culture using new methods. Even after the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics have come and gone, BUNPRO's quest to create human resources linking Japan and the rest of the world through art will go on.

東京アートポイント計画ディレクター　森 司
Tokyo Artpoint Project Director
Tsukasa Mori

「川を越えると文化が変わる」と感じるほど、江戸から脈々と受け継がれてきた東京文化には地域性が残っています。私が大切にしたいのは、生活の中にある価値観をアートとして提示していくことで、日常をより豊かにすること。古き良き風情が香る場所、都市開発が進む場所と、それぞれの街の魅力をひきだし、発信するような文化プログラムを開発し、暮らしの選択肢を広げていきたいですね。

“Cross a river, go into another world”, even today the different parts of Tokyo that have inherited those Edo cultures retain a strong sense of local identity. I want to bring out the appeal of every part of Tokyo, from its long-established neighborhoods redolent of the good old days to areas that are still being developed. I want to develop programs, and which widen the options available in life here.

キーパーソン 4人が語る

ブンプロ × 東京文化

BUNPRO × TOKYO CULTURE

文化研究員が、研究対象であるブンプロに潜入！そこで出会った、4人のブンプロ・キーパーソン。東京で育みたいもの、ブンプロが目指すことを教えてくれました。

Cultural researchers infiltrate the BUNPRO, meeting four of its key people, who tell them what BUNPRO aims at, and what BUNPRO would like to foster in Tokyo.

プログラムディレクター　山口紀子
Program Director
Noriko Yamaguchi

私にとって東京は「働く場所」「生活する場所」でしたが、この仕事に就いてから、「文化に触れる場所」でもあると実感しました。気分転換したい時、行き詰った時に、文化に触れることで世の中の見方が変わったり、目の前が開けたりすることも。東京文化をもっと知って、体験して、楽しんでもらいたい。そういう機会を増やすのが、ブンプロの役目だと思っています。

For me Tokyo was a place to live, but since I've taken up this job I've come to feel that Tokyo is also a place to encounter culture. When I want a change of pace, when I feel blocked, exposure to culture changes my way of looking at the world. I want to help people know Tokyo culture, experience it, and enjoy it more. I believe it is the role of BUNPRO to expand the opportunities for doing that.

広報ディレクター　森 隆一郎
Public Relations Director
Ryuichiro Mori

私たちが取り組んでいるプロジェクト型の「アート」は、トランプの「ジョーカー」みたいな存在だと思うんです。はみ出した存在なのに、無いとゲームが面白くない。ここ数十年、日本の社会は機能的に細分化されて生産性や技術レベルを上げてきました。一方で顕在化する課題のジャンルは多様で複雑です。アートはその課題同士をつなげたり混ぜたりする、切り札的存在なのだと思っています。

I think the project-style “arts” we are involved with is like the joker. It makes the game interesting. Over the past decades, Japan has increased its level of productivity and technology through fragmentation of function. On the other hand the types of issues that emerge have become more varied and complicated. I believe that “arts” is in fact a trump card, linking those issues.

Research topic (5)
The spirit of the Hanamachi culture
-The geisha life-

研究テーマ⑤

花街文化の心意気

～芸者という生き方～

江戸時代に誕生した芸者は、明治以降、花街の料亭にて
芸と真心でお客をもてなし続けてきました。
こうして今も東京に残る花柳界。
その世界へ頻繁に足を踏み入れることができる人は少なく、
馴染みのない人が多いものの、長きにわたり受け継がれてきた
大切な東京文化です。そこで今号では、芸者衆との対話と
素晴らしい舞台を通して、花街の魅力に触れてきました。
華々しい時代を過ぎてなお、東京に花街が生き続ける理由は何でしょうか。

The tradition of geisha dates all the way back to the Edo period. From the Meiji period onward, they have performed and attended to guests at Japanese traditional restaurants in Hanamachi, which still exist in Tokyo. Although only the privileged few can frequent the geisha world and it remains unfamiliar to most of us, the long-standing geisha tradition is a vital piece of Tokyo culture. We decided to speak to several geisha and watch their extraordinary performances to find out how Hanamichi areas have maintained their alluring appeal until today.

芸者は女性として最高の仕事

四季の移ろいを繊細に投影した和食、それを美しく盛るための器、丁寧にしつらえられた和室。それらのすべてが凝縮された料亭は、いわば日本文化の集積地だ。そして料亭のお座敷は、芸者の生きる場所そのものである。「芸者にならなければ、普段お目にかかれないようなお客様とお話をさせていただく機会もなかったと思います。お座敷の中で勉強させていただくことも多く、本当にありがたいです」と話すのは、いわゆる東京六花街のひとつ・赤坂芸者の明日香さんだ。彼女たちは見習い期間中に、接客から言葉遣いを含めた礼儀作法、踊りなどの芸者の基本をしっかりと身につける。最終的に芸歴の長い“大きいお姐さん”の前で踊りを披露し「お披露目」といってお座敷に上がることを許されるのだ。しかしそれは一人前の太鼓判ではなく「これから頑張りなさい」というひとつの区切りに過ぎない。

「置屋のお母さんは、お座敷でご正客の方に『楽しかった、また来るよ』と言っていただくことが芸者の務めとおっしゃいます。会が円満に、円滑に進むお手伝いをし続

There is no greater job for a woman than being a geisha

Step into a carefully decorated Japanese room and take in the sights and smells of wondrous Japanese delicacies, all reflecting the evanescent beauty of the four seasons and sitting on elegant serving dishes. This is the world that awaits guests at Japanese traditional restaurants, which not only embody a thrilling synthesis of Japanese culture. And for geisha girls, ozashiki of those restaurants is the stage where they dedicate their lives to the art. “Had I not chosen to become a geisha, I doubt I would have ever had the opportunity to speak to the kinds of people I now perform for”, says Asuka, a geisha in Akasaka, one of Tokyo’s six Hanamachi districts. “I learn so much from my ozashiki. I am really, truly grateful”. During their apprenticeships, young geisha girls learn etiquette, ranging from courteous service to proper diction, and master the basics of dance and other arts. Training culminates in the moment when each apprentice dances for an experienced “onee-san” and earns the right to make her official ozashiki debut, called her “ohirome”. However, an ohirome isn’t a metaphorical stamp of approval that makes a young geisha a full-fledged performer—rather, it’s simply a stopping point on a long journey that requires constant hard work and dedication.

“The proprietress of my okiya says that a geisha’s job is to delight the guests of honor with her ozashiki performance so they will want to come again”, says Renko, another Akasaka geisha. “Our duty is to make sure that every banquet turns out to be a success, making all the customers happy”. In the tradition of ozashiki, which begins and ends with generous hospitality, there’s always something new to learn—even for the most seasoned veterans. Geisha live in such a severe world that to succeed in it, they must have an uncompromising determination to become a professional. Developing that conviction doesn’t always come easy, though. “It took so much courage to quit my job and venture into the geisha world”, says Akasaka geisha Koiku. “When I was just starting out, I remember an onee-san telling me that ‘there is no greater job for a woman than being a geisha.’ I saw the pride that all the onee-san took in their work, a sense of honor that really deepened my drive to emulate what they do. I want to focus on the tasks at hand and master the skills I need to grow”.

赤坂芸者のお姐さん方。育子さん（中央）、真希さん（右）、真由さん（左）。

Ikuko (middle), Maki (right), and Mayu (left), three Akasaka onee-san.

数々の若手芸者を育ててきた育子さんの舞踊指導は、厳しくもあたたかい。

With a firm but warm approach, Ikuko has trained a bevy of young geisha in the art of dance.

Akasaka

赤坂・芸者衆の芸事

赤坂芸者の心意気五箇条

The five elements of the Akasaka geisha spirit

- “Yes”: Honesty and grace 「はい」という素直な心
- “Thank you”: Gratitude 「ありがとう」の感謝の心
- “I will”: Service to others 「私がします」という奉仕の心
- “Fortunately”: Humility and modesty 「おかげさまで」という謙虚な心
- “I apologize”: Remorse 「すみません」という反省の心

『赤坂浅田』のお座敷に上がる前に踊りの稽古をつけてもらうお三方。

Three geisha take lessons before appearing on the ozashiki at Akasaka Asada.

指先まで気を抜かない。芸者踊りの美しい所作は、細部にこそ表れる。

Even fingertips need to be placed perfectly. When it comes to geisha dancing, the beauty is in the details.

赤坂芸者の明日香さん（右）、蓮子さん（中央）、こいくさん（左）。

Asuka (right), Renko (middle) and Koiku (left), three Akasaka geisha.

けるのが私たちの仕事です」と赤坂芸者の蓮子さん。おもてなしに始まりおもてなしに終わるお座敷では、何年経っても学ぶことが尽きない。厳しい世界ゆえに「必ず一人前になる」という心意気がなければ花柳界で生きていくことは難しいだろう。同じく赤坂芸者のこいくさんも「勤めていた会社を辞めて、この世界に入る時は勇気が要った」と話す。

「そんな時、励みになったのは『芸者は女性として最高の仕事』というお姐さんの言葉。誇りを持って仕事をされているお姐さん方の姿に、より深い憧れを抱きました。私も目の前のことをひとつずつクリアし、成長していきたいです」。

芸者のハレ舞台に観客も沸く

一流の芸能を誇る東京六花街。その中で、芸者衆の踊りの発表場として大正14年に新橋演舞場を設立したのが新橋花柳界だ。以来、その舞台で開かれている「東をどり」も今年で90回目を迎えた。普段はお座敷でしか見られない芸者衆の踊りだが、この時は一般に向けて門戸を開くため「美しい芸者の舞を一目見たい」というファンが多数つめかけ大きな賑わいを見せる。芸者衆にとっても、日頃の成果を大勢の観客の前で披露できるハレの舞台だ。今年の演目は序幕の清元『青海波（せいがいは）』と、二幕目の『にっぽんの四季』で構成。序幕ではこれからの「東をどり」を担う若手連中が華やかに舞い、二幕目では春夏秋冬の移り変わりを豪華絢爛に表現した作品となった。

90回目の記念公演とあって、演目と演目の間に幕を降ろさないという新たな試みを採用。大道具がせり上がり、舞台が回り、涼やかな水芸が披露されるなど、舞台装置を駆使した演出に観客の拍手も止むことがなかった。加えて印象的だったのは、場内にお茶席を設けたり、芸者衆の千社札やオリジナル扇子の販売スペースを作ったりと、休憩中も「観客がいかに楽しめるか」が考慮された空間となっていたこと。時代が変わっても普遍的な芸者衆の心意気が、この場に表れているようだった。

伝えたいのは「おもてなしの心」

高度成長期頃までは活気に溢れ、東京

Audience delight in an amazing geisha production

Tokyo's six Hanamachi have all made na mes for themselves as paragons of entertainment at its finest, but one of the most prominent is the Shimbashi geisha district, where developers built the Shimbashi Embujo in 1925 to serve as a venue for geisha dances. The site has hosted "Azuma Odori" performances on a yearly basis ever since its establishment, making this event the 90th in its history. Although ozashiki is normally the only setting where people can watch geisha dancing, the Azuma Odori performance breaks from the mold—it throws open the doors of the geisha dance world to the multitudes of fans hoping to see the glamorous movements of geisha dancing in person. For those in the geisha world, too, the Azuma Odori is a unique opportunity to impress a large audience with performances that they have trained so hard to perfect. This year's performance featured two acts: Kiyomoto "Seigaiha (Blue Wave of the Sea)", a showcase for the young geisha who will one day fill the central roles of the Azuma Odori, and "Nippon no Shiki (Four Seasons in Japan)", a rich artistic tapestry of seasonal transformations.

To commemorate the performance's 90th anniversary, organizers decided to shift away from convention and keep the curtain open during the intermission between the two acts. The audience responded with unending, resounding applause to the production making full use of the stage set as the set pieces rose up into the air, the stage rotated, and performers emerged to show off enthralling water illusion. The fun didn't end there, though. There was an onsite tea ceremony area and vendor areas selling geisha senjafuda (paper cards posted on shrine and temple gates) and custom-made paper fans, both of which clearly demonstrated the organizers' drive to make the whole experience—even the intermission—as enjoyable as possible for every guest. The enduring geisha spirit, which has withstood the test of time, was on full display at the Shimbashi Embujo that day.

Emphasizing the "spirit of hospitality"

The Tokyo Hanamachi of today may not approach the bustling energy or sheer number of the Hanamachi areas that flour-

Shimbashi

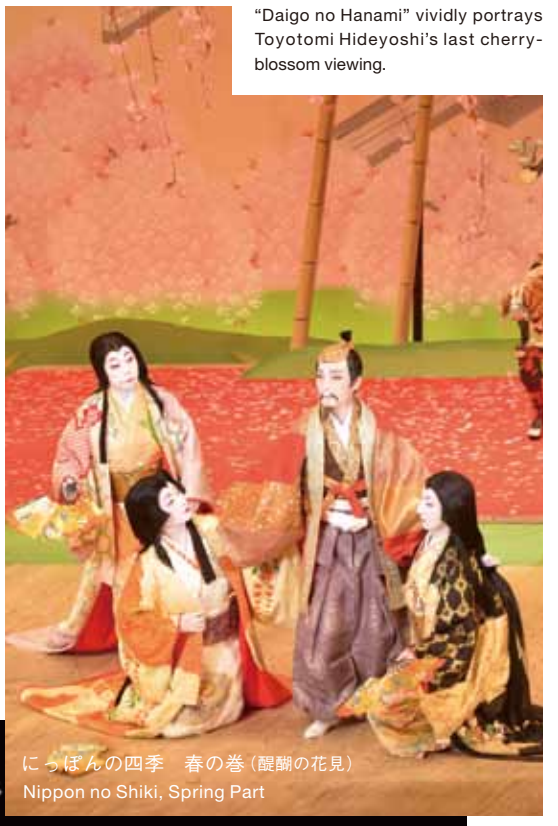
新橋・東をどり

記念公演にふさわしい、清元節のご祝儀曲『青海波』を演奏する芸者衆。

Geisha perform the celebratory Kiyomoto-bushi work "Seigaiha", a fitting piece for the commemorative event.

東をどりの幕開け。若い芸者の華やかで軽快な舞に、観客も釘付け。

A geisha performs the beginning of the enchanting Azuma Odori, a dance that highlights the elegant, nimble movements of young geisha.



「醍醐の花見」。太閤秀吉の最後の花見を、臨場感たっぷりに描いた作品。

"Daigo no Hanami" vividly portrays Toyotomi Hideyoshi's last cherry-blossom viewing.

「陸奥の旅」。東北地方の民謡をバックに、土地の活気を感じるひと時。

Set to folk songs from the Tohoku region, "Mutsu no Tabi" evokes the energy of the land.

「滝の白糸」。華やかな水芸に沸いた後は、夏の夜の涼やかな静寂に浸る。

After thrilling the audience with dazzling water performances, "Taki no Shiraito" settles into the cool tranquility of a summer night.

「夜の梅」。人気役者と幼馴染の、淡く複雑な恋愛模様が美しい一幕。

"Yoru no Ume" depicts the innocent, complicated romance between a popular actor and a childhood companion.

の至る所に存在していた花街。今は最盛期のような賑わいはないが、少なくともその灯を絶やすまいと守られてきたことは事実だ。赤坂の料亭『赤坂浅田』のご主人・浅田松太さんは「9年間途絶えていた赤坂をどりが8年前に復活したのも、地元にお住まいの方やご商売をなさっている方が、赤坂の文化を守ろうと努力した結果です」と話す。また最近では、敷居が高いと思われた料亭で芸者衆の踊りを見ながら料理と酒を楽しむイベントも開かれるようになった。花街が徐々に身近な存在になってきた陰には、伝統を絶やさないようにと支える人々の姿があったのだ。この道56年の赤坂芸者・育子さんの言葉に、そのすべてが集約されている。

「東京六花街が、日本のおもてなしの文化を築いてきた。それはどこに出しても、恥ずかしくない文化だと思うの。だから多くの人に知ってもらいたいし、いつまでも残していきたい」。

10月に行われる『大江戸寄席と花街のおどり その四』は、六花街の芸者衆がひとつの舞台に立つ希有な機会。六花街が一堂に会すれば、東京文化を後世に残していくための大きな力が生まれるはずだ。

東京六花街
The six Tokyo Hanamachi

新橋 Shimbashi

明治新政府の要人が贔屓に。大正時代より芸の向上に取り組み"芸の新橋"とも。

Shimbashi geisha focusing heavily on artistic skills from the Taisho period, eventually becoming known as "Shimbashi of the arts".

赤坂 Akasaka

かつては軍人、戦後は政治家や大企業の重役に愛された。芸者の特徴は「艶やか」。

Akasaka geisha features known as "bewitchingly elegant".

浅草 Asakusa

下町らしい活気に溢れた花柳界。東京で唯一「幇間（たいこもち）」（男芸者）が所属。

The Asakusa Hanamachi is the only Tokyo Hanamachi where you can find taikomochi (male geisha).

神楽坂 Kagurazaka

明治時代は文豪たちが居を構えていたため、インテリの遊び場として繁盛。

The Kagurazaka Hanamachi thrived as a popular entertainment district for members of the intelligentsia.

芳町 Yoshicho

江戸時代、芝居町として栄えた頃から芸者が存在。東京で最古の歴史を誇る。

Geisha have worked in Yoshicho since the area's prosperous days as a playhouse district during the Edo period.

向島 Mukoujima

芸者の数が多く、若手も多数所属。観光客も気軽にお座敷遊びを体験できる。

Mukojima is home to large numbers of geisha and a popular destination for tourists to casually experience ozashiki-asobi.

※参考文献『東京六花街 芸者さんに教わる和のこころ』（浅原須美著/ダイヤモンド社）

ished during the high-growth period several decades ago, but communities are at least taking steps to keep the tradition alive. Shota Asada, proprietor of the Japanese traditional restaurant Akasaka Asada, says, “the Akasaka Odori had essentially been a dead tradition for nine years until eight years ago, when local residents and merchants—so determined to preserve Akasaka culture—played an essential role in reviving the dance”. Recent years have seen more positive changes, too. Although traditional Japanese restaurants have tended to be a bit intimidating to most people, they have started to host more and more events where guests can enjoy great food and drinks while they take in enrapturing performances by geisha girls. What’s opening these doors? Simply put, Hanamachi areas owe their improved accessibility and rejuvenated popularity to people invested in upholding the venerable heritage. The word of Ikuko, 56-year veteran of the Akasaka geisha community, epitomizes the point:

“The six Tokyo Hanamachi areas have fostered the culture of Japanese hospitality”, she says. “That spirit will always be a source of pride, I think, no matter what the situation is. That’s why I hope we can get more people to appreciate it and carry on that important legacy”.

There will be an event this October in Tokyo that will offer a rare opportunity to see geisha from all six Hanamachi areas on the stage: the “Rakugo: Traditional Storytelling and Traditional Geisha Dances”. By pooling their talents and resources, these geisha will be able to generate the dynamic energy it will take to sustain Tokyo culture on into future generations.

90th Anniversary!

祝90周年東をどり

芸者衆総出で迎えるフィナーレ。最後は客席ともども三本締めで幕を閉じた。

All the geisha came out for the finale, with the performers and audience joining together for a sanbon-jime (three sets of three claps and one final clap) to punctuate the ending.

芸者がお点前を見せるお茶席も、休憩中は行列ができるほどの人気を見せた。

During the intermission, people lined up for a traditional tea served by geisha.

この秋、花街文化を体験できる

大江戸寄席と花街のおどり　その四

Rakugo: Traditional Storytelling and Traditional Geisha Dances

林家正蔵
Shozo Hayashiya

平成23年から始まった、落語と花街のおどりを組み合わせた公演で、今回が4回目です。江戸の町人文化の隆盛のなかで花開いた落語と、花柳界につたわる芸者衆の踊りと演奏を楽しんでいただくエンターテインメント。今回は東京六花街が勢揃いで一層華やかに。

Enjoy traditional Japanese entertainment. Street scenes and life in the flourishing Edo period are recaptured in a masterly performance of a rakugo, a traditional one-man storytelling show. It will be followed by beautiful traditional dances performed by geisha from six of the entertainment districts in Tokyo.

柳家権太楼
Gontaro Yanagiya

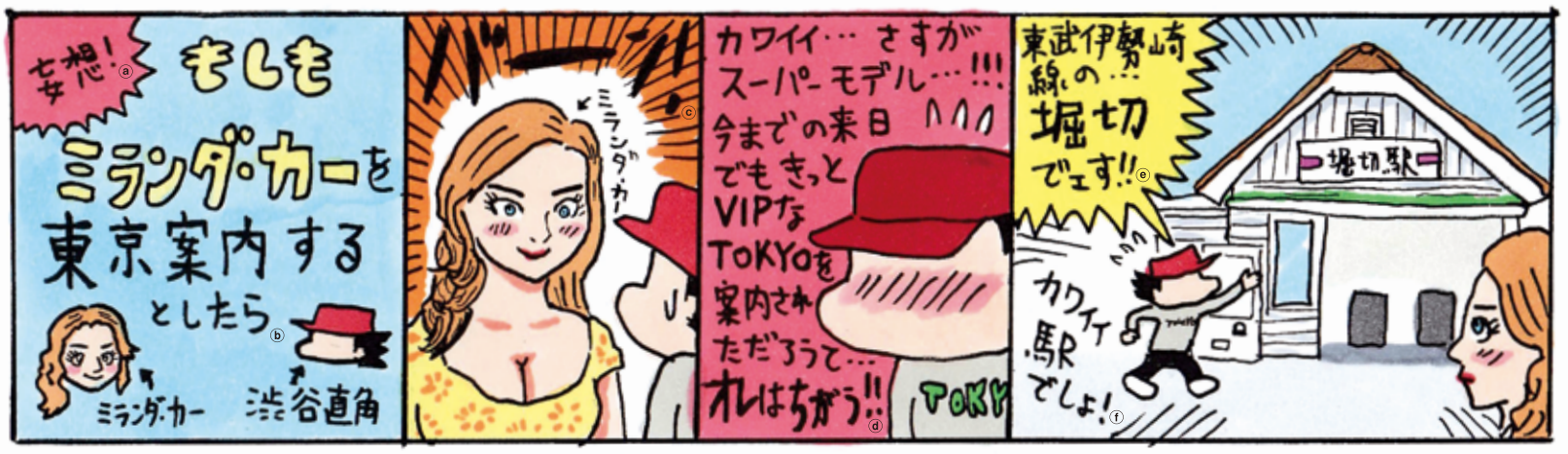
10月5日（日）15：00開演　東京国際フォーラム ホールC

落語：林家正蔵、柳家権太楼
おどり：新橋、赤坂、浅草、神楽坂、芳町、向島の芸者衆
チケット料金 全席指定／一般：4,000円　学生：2,000円
（チケット発売中）
※未就学児入場不可

10.5 (Sun) at 15:00
Tokyo International Forum Hall C
Admission: 4,000 yen (Adults), 2,000 yen (Students)
＊Pre-school children not admitted.

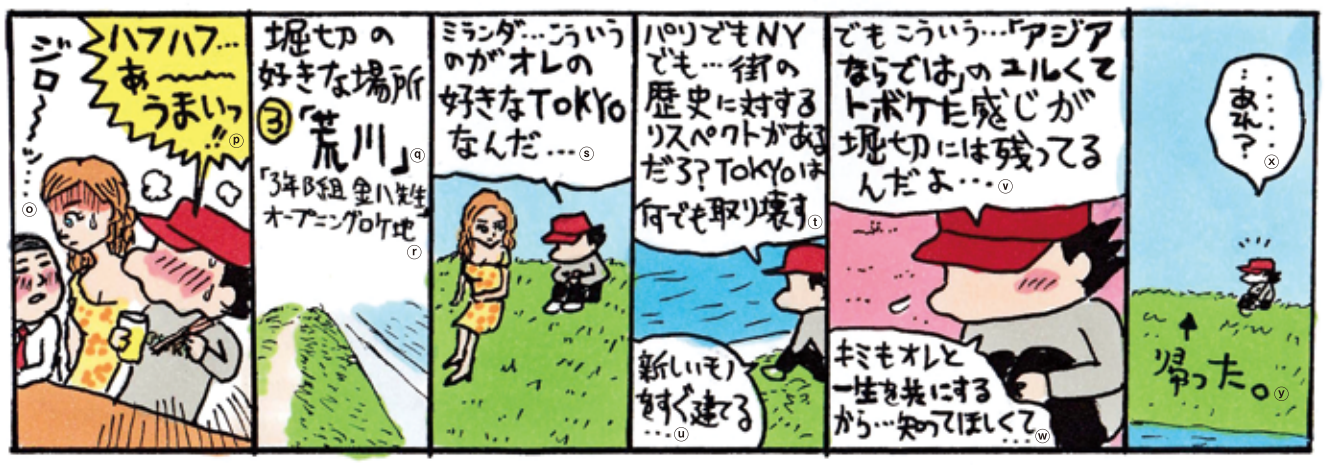
Comic

If I could show Miranda Kerr around Tokyo / Chokkaku Shibuya



a. Imagine!!
b. If I could show Miranda Kerr around Tokyo
c. Ta-da!!
d. Ooo, kawaii. Of course she is, she's a supermodel... I bet she gets shown Tokyo's VIP side whenever she comes to Japan...Not from me!
e. This is Horikiri Station, on the Tobu Isezaki line.
f. Kawaii, isn't it?

g. Places I like in Horikiri #1: Tateishi Burger
h. A hamburger vending machine!!
i. Drop a few coins in, why don't you?
j. Cha-ching
k. Burger time!
l. Cool Places in Horikiri #2: Harbin Dumplings
m. Only five counter seats – it's a small place. I recommend the water dumplings! Especially the tomato ones!
n. Drunk customers.



o. She's cute…
p. Hot hot hot! Aah…so good.
q. Cool Places in Horikiri #3: Arakawa River
r. Lots of Kinpachi Sensei scenes were set here
s. Miranida…this is the Tokyo that I like.
t. Paris and New York have bits of history that people respect, right? But Tokyo just tears everything down.
u. Things get built all the time.
v. But Horikiri still has that… "distinctive Asian" feel to it – gentle and slow.
w. We'll be sharing our lives together… so I wanted you experience it…
x. …huh?
y. Gone.

渋谷直角
Chokkaku Shibuya

ライター・漫画家。エッセイ集『直角主義』、コミックス『カフェでよくかかっているJ-POPのボサノヴァカバーを歌う女の一生』『RELAX BOY』が発売中。8月、新刊コミックスを扶桑社より発売予定。

Issuer's Note

発行人後記

Art Center Ongoing（吉祥寺）、末廣亭、花園神社、ゴールデン街、新大久保、東をどり（新橋演舞場）、赤坂浅田。今号では東京文化のふり幅を意識した。先端のアートセンターから寄席、繁華街、料亭まで。通底するのは、ライブ感。先端も伝統も混沌も洗練も、留まらずに更新していこうとする意志とパワーのみなぎる現場。ゆく川の流れは絶えずして……新宿の熱にぼうっとなりながら、頭の片隅に三味線と鼓の音が響くようなバランス感覚が、脳内東京文化を形作る。頭寒胸アツ。あなたを更新する何かは東京の至る所に隠れている。（もりりゅう）

In this issue, we turn to Tokyo's cultural diversity, which spans from the cutting edge art center, to drinking/amusement centers to high-end Japanese restaurants. All these places share a basso continuo – a pulsing vitality. Tradition and the ultramodern come together, in chaos and in refinement, to form a vibrant scene of continuous renewal. The flow of the river is ceaseless…the balance between losing yourself in Shinjuku's fervor and the reverberations of the Shamisen and Tsuzumi (hand drum) echoing through your mind forms the essence of Tokyo culture. Presence of calm mind juxtaposed with passion. Renewal awaits you in Tokyo. (R.M)

About Tokyo Culture Creation Project

東京文化発信プロジェクトとは

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が、芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施している事業です。多くの人々が文化に主体的に関わる環境を整えるとともに、フェスティバルをはじめ多彩なプログラムを通じて、新たな東京文化を創造し、世界に発信していきます。

www.bh-project.jp

Tokyo Culture Creation Project, organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture in cooperation with arts organizations and NPOs, aims to establish Tokyo as a city of global cultural creativity. The project facilitates involvement of a larger number of people in creation of new culture as well as it creates and globally disseminates new Tokyo culture through organizing international festivals and other diverse events.

www.bh-project.jp/en

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階　tel：03-5638-8805｜fax：03-5638-8811

Column

Where the master does his work

あのひとの現場

小川 希の アートセンター
Art Center of Nozomu Ogawa

小川 希／Nozomu Ogawa

2002年から5年間、公募展覧会『Ongoing』を企画開催し、2008年に吉祥寺に芸術複合施設『Art Center Ongoing』を設立。2009年よりJR中央線・高円寺駅〜国分寺駅で展開するアートプロジェクト『TERATOTERA』を、東京都・ブンプロと協働で主催している。

一軒家を改装し、2Fにギャラリー、1Fにカフェという構造の『Art Center Ongoing』を実現させたのが6年前。ここはヨーロッパでいうところのアートセンターと同じ役割を持っていて、ギャラリーに訪れた人たちが作品についてカフェで談義をしたり、ライブやトークイベント、ワークショップに参加できたりする芸術複合施設です。展示している作品は「言葉で捉え切れないけれど、確実に人の心を動かす力を持っている」もの。商業ベースに乗りにくい作家が自由に表現できる場所という意味で、なくてはならないと思っています。吉祥寺という街を選んだ理由は、中高時代をこの辺で過ごし、街のことをよく知っていたから。かつ吉祥寺より西に住んでいる多くの作家と、東側に住んでいるお客さんの双方がアクセスしやすいギリギリのポイントだと思ったからです。僕は普段ここでメールの返信をしたり、作家の紹介文を書いたりと裏方的なこともしていますが、メインとなる仕事は訪れる人とのコミュニケーションですね。作家とお客さん、あるいはお客さん同士を繋げることも積極的に行っています。2週間単位で展示替えをするので常に作家が入れ替わり、イベントのゲストも変わり、それにつれてお客さんも変化し、様々な人が出入りするハブのような場所としてようやく機能するようになりました。さらに今はここでやっていることを広げて、街全体にアートセンターのような役割を持たせた『TERATOTERA』というプロジェクトで作家と社会を繋ぐことができています。世代もジャンルも、それぞれが暮らしている場所も越えて、アートを通じて集う。それは、とても豊かなことです。作家同士が作品や今の社会について真剣に話し、アートのことをよく知らない人も新しい出会いから何かを感じ取り、考え方やモノの見方を更新していきます。『Art Center Ongoing』は自然とそれが叶う「学校」のような存在なのかもしれません。

It has been six years since the establishment of Art Center Ongoing, a house remodelled into a ground-floor cafe and a second-floor gallery. Fulfilling the function of a European art center, it is a combined art facility where gallery visitors can talk about works displayed in the cafe, witness live-music or talk events, and take part in workshops. Works on display are those whose effect may not be completely capturable in words, but which have a distinct emotive power. I believe the place is vital as a venue granting free expression to those artists who find it difficult to establish themselves on a commercially viable basis. I chose to locate in Kichijoji because I knew the area well, having spent my middle and high school years here. I also felt it was an exact point of intersection, easy of access to both the many artists who live to the west and a large potential audience living to the east. While I am usually here in a behind-the-scenes role, answering emails or writing publicity for artists, my most important job is communication with visitors. We encourage visitors to connect with artists, and also with each other. With displays changing every two weeks, there are always new artists, new guests for events, and visitors changing with them, so the place has finally begun to function as a hub for a wide variety of different people. And now, widening our own current activities, the TERATOTERA project linking artists to society has given us a role as an art center for the entire area, bringing different generations and genres together from different areas through art. This is a good thing. Artists talk seriously about their work, or about the world around them, while people who are less familiar with art find new encounters with it and responses to it, and ways of thought and ways of viewing are made new once again. Art Center Ongoing may have become a kind of “school” where that sort of thing naturally comes to pass.

Tokyo Creative / Minori Kai

Column

トーキョークリエイティブ

文：甲斐みのり
Minori Kai

エッセイスト。旅、散歩、お菓子、手土産、クラシック建築、暮らしや雑貨などを主な題材に、書籍や雑誌に執筆。『東京建築 みる・あるく・かたる』『東京ロマンチック案内』『東京でお酒を飲むならば』など、東京に関する著書多数。

「東京100年の老舗地図」

はじめての海外旅行はフランスだった。シャルル・ド・ゴール国際空港からバスに乗り込み、車窓の風景を食い入るように眺める。パリの中心部へ近づくにつれ、口数が少なくなる私。案内役の友人が体調でも悪いかと心配するので、慌てて誤解を正すべく心の内を伝えた。「目にするもの全てがファンタスティックで、逐一、言葉が出てこなくて」。それまでクラシックホテルなど日本の近代建築を好んできたが、築100年以上の趣ある石造りの建物がどこまでも続く、美しいパリの町並みを目の当たりにし、感動より先にカルチャーショックを覚えたのだ。

関東大震災や第二次世界大戦の空襲を乗り越え復興を果たした東京で、築100年を超える建物と出合うのは容易でない。そもそもパリとは、土壌や気候が大きく異なる東京。みなが快く暮らすため、建物も新陳代謝が繰り返される。それが都市の玄関口である「東京駅」のように、歴史的建造物を竣工当時の優麗な姿で残す動きがあるのは喜ばしいかぎり。「江戸東京たてもの園」には、文化的価値のある江戸時代から昭和初期までの建物が保存されているけれど、現地保存が難しい場合は、たての園のような野外博物館への移築や復元が根付けばさらに嬉しい。

ちょんまげ、侍、忍者に芸者……。浮世絵や時代劇の中の風俗。それらを期待して東京にやってくる外国人観光客は、さすがに少なくなったろう。だからこそ、秋葉原の電気屋街や、原宿の洋服屋だけではない、ひと昔前の文化にも触れてみてほしい。100年前の町並みは残されておらずとも、東京には100年続く老舗ならばいくつもあるから。

すしなら神田「笹巻けぬきすし総本店」。天ぷらは浅草の「三定」。上野「伊豆栄」でうなぎ。薮・更科・砂場と系統がある蕎麦屋。甘いものは人形町「初音」で。工芸や文具や装飾品、はたまた金魚まで。味わったり身につけたり目で見て楽しんだり。老舗の良品は、日本に生まれ東京に暮らしながらも、新鮮なものばかり。自ら作る「東京100年の老舗地図」を手に、国籍・性別・年齢問わず、様々な人を案内するのが夢である。

"100 Tokyo Century Shops"

My first trip abroad was to France. The closer I came to downtown Paris, the more I was lost for words. To counter the worries of the friend who was showing me around that I might be ill, I quickly said what was on my mind. “Everything I see is so fantastic, I just don’t have words for it all”. Up until then my taste had run to the “modern” architecture of Japan’s vintage “classic” hotels, but now with the beautiful streets of Paris before me, lined with stone buildings all well over a century old, I was more than struck dumb; I was in shock. In Tokyo, which went through the Great Kanto Earthquake of 1923 and the air raids of World War II, it is not easy to find century-old buildings. Paris also has different soil and a different climate. Buildings are also frequently knocked down and reconstructed to provide greater living comforts. I am delighted that there now exists a movement in Tokyo to preserve historic structures in their beautiful original form, as has been done with Tokyo station, the gateway to the city. Buildings of cultural merit from mainly the 19th and early 20th centuries have been preserved at The Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum, and I am also happy the idea of taking a structure apart and reassembling it in an open-air architectural park has taken root where it proves impossible to preserve it on its original site. Topknots, samurai, ninja, geisha, the manners and customs of the ancient world of costume films and ukiyoe pictures: I am sure that few foreign tourists come to Tokyo expecting to see this. But along with Akihabara’s “Electric Town” and the clothing stores of Harajuku, I would like to bring them into contact with the culture of the past. While the Tokyo streets of a century ago are no longer to be found, there are establishments from a century ago that still remain.For sushi, there is the “Sasamaki kenuki sushi sohonten” in Kanda. For tempura, it’s “Sansada” in Asakusa. The “Izuei” in Ueno specializes in eel. The “Yabu”, “Sarashina” and “Sunaba” are long-standing soba noodle successor. “Hatsune” in Ningyocho is known for sweets and desserts. There are long-established shops selling crafts, stationery, decorative items, and even goldfish. Look, taste, or try on. No matter where you’re from, what gender or how old you are, my dream is that I guide guests with my “100 Tokyo Century Shops”.

『TOKYO PAPER for Culture』のバックナンバーは、公式ウェブサイトでご覧いただけます。
www.bh-project.jp

東京文化発信プロジェクト
@tokyobunka

『TOKYO PAPER for Culture』vol.005 東京ハレとケ物語

発行人：森隆一郎（ブンプロ）｜編集ディレクション・執筆：水島七恵｜編集部（ブンプロ）：浅野五月、キムキョンナ｜編集・執筆：石井美智子（P6〜P10）/ Playce｜執筆：仲野聡子（P11〜14、P16）｜アートディレクション：漆原悠一 / tento｜デザイン：中道陽平 / tento｜写真：阿部健（表紙、P2〜P5）、米田渉（P11〜14）｜イラスト：死後くん（P3〜P5、P15）、別府麻衣（P6〜P10）、オオクボリュウ（P16）｜取材協力：末廣亭（表紙、P2、P4）東京新宿鎮座 花園神社（P3、P5）、新宿三光商店街振興組合・新宿ゴールデン街商業組合（P2）、東京発・伝統WA感動実行委員会、特定非営利活動法人和塾、東京赤坂組合・赤坂浅田・赤坂会館（P11〜P12）、東京新橋組合・新橋演舞場（P13〜P14）｜協力：club SONIC iwaki｜ロゼット制作：WHYTROPHY｜翻訳：オフィス宮崎｜印刷：太陽印刷工業株式会社｜発行：東京文化発信プロジェクト室｜発行日：平成26（2014）年7月9日｜禁・無断転載